

## アジア経済研究所創立50周年記念 連続特集の開始にあたって -- 誰に向かって、何を書くのか

著者	川上 桃子, 町北 朋洋, 山形 辰史
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	178
ページ	2-2
発行年	2010-07
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00004456">http://hdl.handle.net/2344/00004456</a>

# 誰に向かって、

# 何を書くのか

川上桃子  
町北朋洋  
山形辰史

今年七月、アジア経済研究所（アジ研）は、特殊法人としての発足から満五〇年を迎えた。これを記念して研究所の和文機関誌『アジア経済』では、四月号から特別連載「アジ研の五〇年と途上国研究」がスタートしている。これは、研究所の先達たちへのインタビューを通じて、半世紀にわたる研究所の歴史と日本の発展途上国研究の歩みを振り返る企画であり、一年にわたる連載を通じて、地域別、研究テーマ別、研究所の主要事業別に、研究活動の流れとその成果の回顧をお届けしていく予定である。

この特別連載がアジ研の「来し方」を振り返るものであるのに対して、本誌『アジ研ワールド・トレンド』では、今号から、アジ研と日本の発展途上国研究の「行く末」を考える三つの特集を連続してお届けする。

過去五〇年にわたる研究所と発展途上国研究の歩みを振り返ることは、日本の途上国研究者たちが「研究してきたこと」を知る過程であると同時に「研究してこなかったこと」を明らかにするプロセスでもある。先輩たちへのイ

ンタビューを読み、研究所草創期のバリエーション溢れる空気に触れるとき、私たちは、近年の日本の発展途上国研究をとりまく研究潮流の変化の大きさを感じ、その方向を見定めることが必要であることを痛感する。

私たち三名の特集企画者は、日本の途上国研究のこれからを考えるにあたって、発展途上国研究を志す者は「誰に向かって、何を書こうとしているのか」という問いを発してみたいと思う。

研究とは、研究対象との対話であり、研究者仲間との対話である。未来の仲間には知識を引き継ぐ行為でもある。発展途上国を研究する者はまた、対象国の人々、研究者、国際援助や実務の現場にいる人たちとの対話も意識する。今号から始まる連続特集では、「研究コミュニケーションの使用言語」、「新たな研究課題と手法」、「国際協力の現場との相互作用」という三つの視点から、これからの発展途上国研究がめざす対話について考えていきたい。

## ●誰に向かって書くのか？

本号の特集「『英語の世紀』の地域研究」および次々号の特集「国際協力と研究者・現場と研究室の深い河」では、私たちは、誰に向かって書き、誰との対話を意識して研究をするのかを考える。

本号の特集がとりあげるのは、世界的な規模で生じつつある「英語での発信」志向の強まりが日本の地域研究

に与える影響である。研究者による「何語で書くか」をめぐる選択は、「誰に向けて書くのか」をめぐる判断と不可分である。巨大な英語の学術市場の出現は、国境を越えた知識蓄積の加速化という大きなメリットを有するが、それへの過度な傾斜は、発展途上国をめぐる研究コミュニケーションの多面的な発展に対して負の影響を及ぼす可能性を持つ。私たちはこの二つの相反する力学とどう折り合いをつけていくべきなのであるのか。

次々号では、アジ研の研究成果の主要な需要者グループの一つである国際開発・協力業界との対話から、今後の研究の素材となるべきいくつかのテーマを得ようと試みる。我々は発展途上国の人々にとっての一種の代弁者的役割を担っているのだから、発展途上国の開発のあり方と、それに対する我々の関与という意味での国際協力のあり方が、一つの重要な研究テーマになるのは自然である。また今年、アジ研が、開発専門家を養成する開発スクールを創設してから二〇周年に当たる。開発スクールの成果と課題を回顧すると共に、国際開発のために今後アジ研がどのような貢献をしようかを展望する。

## ●何を書くのか？

アジ研は現地主義によって成果を収めてきたが、発展途上国を取り巻く国際環境は大きく変化し、現地主義的

法だけでは、接近や理解、そして問題の再定義が容易でない新しい課題、現象が目の前に立ち現れている。我々は今、これから、何を書くべきか。つまり、何を、いかに解くべきか。次号の特集「温故知新・途上国研究のわすれもの・新しい架け橋」では、一国を対象とする現地主義は、国際環境の変化に伴って変質してきた課題の分析や、国際環境の変化そのものの分析には向かないこと、従って新しい研究課題と手法の導入が今後重要となることを提起する。国単位の地域研究では接近が難しい課題、手を届かすべきであった重要な課題、そして問題を再定義するための新しい「めがね」を紹介することで、「何を、いかに解くか」を考えたい。

この三つの連続特集は、いずれも「問いを発する」ものであつて、それに答えを出す試みではない。むしろ、多様な専門、多様な立場の方々に執筆をお願いすることで、それぞれの問いに対する答えがどれほど多様でありうるかを読者の皆さんと共有したい。発展途上国と同じように、発展途上国研究もまた、無限の可能性と脆さとを秘めている。この三つの特集が、読者の皆さんを発展途上国研究にお招きする扉となるならば、望外の喜びである。

（かわかみ ももこ） 新領域研究センター  
まちきた ともひろ 新領域研究センター  
やまがた たつふみ 新領域研究センター